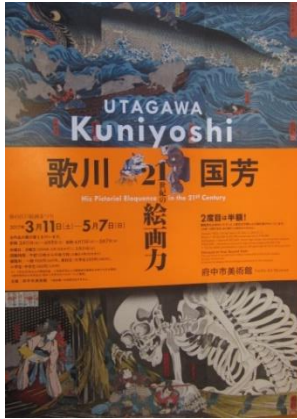


21 世紀の絵画力 歌川国芳

府中市美術館（東京）前期 2017. 03. 11～04. 09 後期 2017. 04. 11～05. 07



「歌川国芳」(1798～1861)は江戸時代後期の浮世絵師で、同時代の「北斎」や「広重」を凌ぐ勢いの人気があ
るの
は、「**作品の中に秘められた造形力や美意識があるため**」とされている。明治時代以降、「国芳」は人気があ
ったものの、美術史上では必ずしも高く評価された訳
ではなかったが、作品に**斬新なデザイン力、奇想天外な
アイデア、確実なデッサン力、笑いが満ち溢れた卓越
した描写力**が認められ、浮世絵の枠に止まることなく広
範囲な魅力を持つ作品を制作した。

本展は「二部構成」となっており、前期・後期を合わせて「**およそ 240 点**」
の作品が展示されて、摺りの状態、保存状態とも非常に良質の作品が味わえる。

第1章「19世紀の国芳」では作品の成り立や当時のありようを紹介し、画伯
が手がけた様々な仕事や歌舞伎を題材とした作品が、どんなに夢一杯のもので
あったかなどのポイントを紹介している。

第2章「21世紀の国芳」では、画伯の作品がどうして今輝いているのか、ど
んなところが現代人に訴えられているのかを、造形の手法や題材、作者の心と
いった点から探っている。

さぬきのいんげんぞく ためとも
《**讃岐院眷属をして為朝をすくふ図** 部分》(1807～11年) 写真上 (前期展示)

源為朝が九州から都に上る途中に暴風雨に遭遇し、一行の船が難破したため、
妻は波を鎮めるために海に身を投げ、為朝も死を覚悟し自決しようとしたが、
どこからともなく讃岐院の烏天狗が飛来して為朝を制し、子供と共に救出した
様子で**物語の持つ幻想性を見事に画像化した作品**である。

そうま ふるだいら
《**相馬の古内裏**》(1845～46年) 写真下 (後期展示)

新皇と称した平将軍が下総猿島に築いた王城の廃墟「相馬の古内裏」を舞台
に、勇士「大宅太郎光国」と妖術を用いる将軍の遺児「たまや滝夜叉姫」が対決する
場面描写である。画伯は、光国の前で数百の骸骨が戦闘を繰り広げる場面を巨
大な骸骨の出現に置き換え、「滝夜叉姫」と遭遇する場面と繋ぎ合わせている。

闇の奥から全面に押し出してくる巨大な骸骨は解剖学的にも正確なものとし
られ、**実にリアルに描かれている作品**である。

参考書 恵 俊彦著：《**もっと知りたい歌川国芳 生涯と作品**》 東京美術 (2008)